

## 津久田の赤城神社(つくだのあかぎじんじゃ)



社伝によると、むかし崇神(すじん)天皇の皇子の豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)が東国に入ってから国が安らかに治まったので、人びとが感謝して地蔵岳の中腹に社(やしろ)をつくって祭った。その後、大同元(806)年に大沼の湖畔に社を移したので、年号にちなんで大沼周辺を大沼と呼ぶようになった。津久田の人びとは、大同4年に、もとの社があったところから古い祠(ほこら)を津久田に移して赤城神社としてお祭りするようになった。

しかし、建仁元年(1201)、大きな天候異変がおきて、雨がたくさん降ってやまずにお宮が水に浸ってしまった。津久田の人びとは、神様がおこっているのではないかと考え、占いによって神様の考えを聞いてみると「北の方向に数百歩いったところに、神聖な土地がある。いちばん良い所で、神様が住むべき土地である。」ということ

だった。そこで、よく木のしげったこの土地に社をつくり、鏡を納めると天候も落ち着いたので、これ以降は鏡の森大鎮守(だいちんじゅ)として祭ってきた。

その後、鎌倉時代に白井城がつくられた時に、長尾氏によって鬼門よけ(北東の方向に神社を造って災難をさけること)として大切にされ、社もたびたび整備されり、社領が寄進されたりした。また、室町時代の寛正(1460年)のはじめに、悪い病気が大流行して多くの人が亡くなった時に、長尾氏は神様のお告げを得て、大己貴命(おおなむちのみこと・大国主の命・大黒様、国造り・農業・商業・医療の神様)、少彦名命(すくなひこなのみこと・恵比寿様、健康を守る神様)もいっしょに祭って、病魔が退散するようにお祈りすると、たちまち悪病がやんで人びとに幸せがもどった。



安永二(1773)年には豪族の狩野佐次兵衛が近郷の十か村の人びとに呼びかけて、社殿の造営と鳥居の建立を行い、みごとな彫刻群とともに翌年の秋に完成した。

明治になると、神仏分離のため華蔵寺法印寛徳は神職に復職して、角田因幡(いなば)と改め神主として奉仕するようになった。また、明治元年から皇族の一つである華頂宮家(かちょうのみやけ)の祈願所となった。

明治五年に社格が定められた時には、赤城神社は特別の由緒があることによって当時

の敷島村第一の村社となった。そのため、満州事変、支那事変、第二次世界大戦等に出征の軍人、徴用馬等敷島村応召は、必ず全部当社前にて祈願祭を行い出発歓送、また帰村もここで歓迎するのが例であった。

昭和三十二年の近所への放火による飛び火によりわら屋根平屋づくりの八幡宮の本殿



と赤城神社の拝殿が焼失し、本殿も被害を受けたが、翌年に拝殿を、昭和四十三年に赤城会館を新築した。また、平成十七年に本殿の彫刻を修理・彩色を行ったところ、彫刻の裏から「関口文次郎」の銘が現れて、江戸時代の名工の作品であることが分かった。

なお、東西の破風（はふ）に四頭のチョウが舞っているが、これは、昔この地域でも見られたと思われるヒメギフチョウではないかと想像してみるのも楽しい。

### 関口文治郎(文次郎)

1731(享保16)～1807(文化4)。彫刻師。勢多郡上田沢入(現・桐生市黒保根町)に生まれる。隣村花輪村に住む石原吟八郎の門人となり、武州妻沼聖天宮の造営に当たって師匠を手伝う。1752(宝暦2)年、妻沼聖天宮本殿の完成は弟子の立場であったが、師匠の片腕となるほどに技術を高めた。師匠から独立して在郷の彫工を育てることに務め、上田沢村に彫刻師集団を創設した。文治郎を棟梁とする彫刻の集団は郷の遠近にすばらしい作品を現代に残している。幕府より武江公儀彫刻師の名を許され、日光東照宮の修繕を命ぜられる。代表的なものとして妻沼市聖天宮の本殿・幣殿・拝殿、秩父大滝三峰十一面堂の本殿・拝殿、榛名町の岩井堂観音、伊那長谷村の熱田神宮、高崎市の山名八幡宮、宮城村の金剛寺、箕郷町の赤城若御子神社、桐生市の天満宮、黒保根村の栗生神社等があり、榛名町の榛名神社は最期の作品である。(新世紀・ぐんま郷土史辞典)

## 津久田鏡森の歌舞伎舞台(つくだかがみのもりのかぶきぶたい)



地域の人びとから下の杜(しものもり)と親しまれている赤城神社の境内にあります。

間口五間(約10m)、奥行き五間半、入母屋造の固定式農村歌舞伎舞台で、内部は平舞台・二重・三重の3部分に分けられ、平舞台左右の板壁は、開演時、外に倒され、舞台面を広げるガンドウ機構になっています。三重は、平舞台より3尺(約1m)高くつくられ、

開演時は奥壁が外に倒され、背景をつけることによって、舞台を奥深く見せる遠見機構になっています。また、二重は、底に木製の車を取り付けられ、左右に移動できる工夫がされています。

開演時には、舞台前面の左右に下座(はやし、義太夫を語る席)が、そして下下座(しもげざ、正面左側)には花道がつけられます。

この舞台は、残されている「舞屋木数覚之帳(まいやきかずおぼえのちょう)」などから、明治2年(1869)に建築されたものと思われます。

## 赤城護国神社社殿(あかぎごこくじんじゃしゃでん)



下の杜と呼ばれる赤城神社本殿の左後ろにあります。

神社の宝物庫かと思われるような間口2.1m、奥行き2.16m、高さ3.3m、瓦葺き、入母屋照破風土蔵造の小さなこの建物は、敷島小学校(現・津久田小学校)の奉安殿であったものです。

大正十年(1921)当時、学務委員であった小池原の須田行作氏が、県内でもまだ珍しかった奉安殿を寄付し、校庭の東隅に建てたものです。

屋根は面積に合わせた特注の藤岡瓦、壁は中に金網を塗りこめ、表面は大磯産の黒石を用いた洗出し仕上げ、その他の資材は村内産を用い、職人はすべて村人という、珍しい近代化遺産です。残念なことは、職人の名前、建築費などがつまびらかでないことです。

昭和二十年以後、学校の倉庫に用いられていましたが、津久田小学校の新校舎建設にともない、昭和四十九年、現在地に移され護国神社として、赤城町北地区の戦没英霊三四八柱を招魂合祀しています。